PART 3 IP統合への道筋

モバイル&IPをユーザー目線で実行 第一弾は「DIONとEZのメルアド統合」

ここ数年のIP市場の成長ぶりは、通信キャリアに対して、「これまでの電話事業からいかに脱却していくか」という課題を突き付けるものとなっている。トラフィックの中身は音声とデータの逆転がすでに始まっている。そう遠くない時期に収益面でもこの現象が起こるだろう。

KDDIが掲げる「モバイル&IP戦略」も、IP市場の急成長にいかに乗るかの道筋を示しているに他ならない。

ここでは、IP事業に関する同社の取り組みと、モバイルとの融合に向けた動きを探ってみる。

バックボーンは2010年に統合

まず、通信市場が電話からIPへ本格的に移行するための基盤中の基盤となるネットワークインフラからみていく。

キャリア各社が構築を進めているIPベースの次世代ネットワーク。KDDIではこれを「PERSEUS(ペルセウス)」と命名した。

特徴は、ネットワークのコア部分とエッジ部分の機能を分離させた点。コアネットワークについては、WDM(Wavelength Division Multiplexing:波長分割多重)によるバックボーン容量の拡大とともに、3段階のフェーズで階層構造をIP over WDMまでシンプル化することで、コスト軽減を図る。一方のエッジ部分は、サービスノードを順次導入し、新サービスの提供や各サービスのインターワークをタイムリーに提供していく。

PERSEUSは、2000年10月から2.4Gbpsの回線容量で稼働を開始し、現在企業向けのIP-VPNサービス「KDDI IP-VPN」のバックボーンとして利用されている。今後は、インターネット接続サービス「DION」へと適用範囲を広げる。最終目標は2010年、テラビットクラスの超高速伝送網へと発展させ、移動体通信や電話なども包括した統合ネットワークを実現する計画だ。

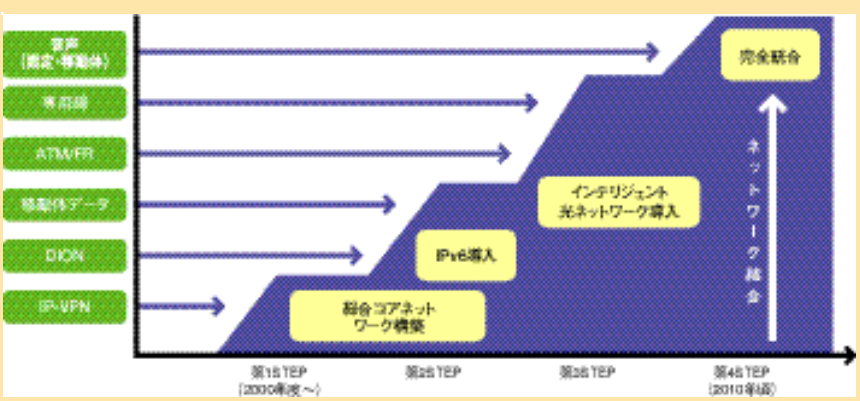
他方、アクセス系のブロードバンド化については、インターネット接続サービス「DION」でアッカ・ネットワークスのADSL回線を利用したメニューについて1.5Mbpsから8Mbpsへ高速化するとともに、NTTの「フレッツ」対応でもADSLに加えて、Bフレッツを利用するFTTHメニュー「ブロードバンドDION with“F”」を9月から提供開始した。

また、自らもFTTH事業の商用化に向けた態勢整備に取りかかる。その手始めに、2002年3月からCATV事業者の東京ケーブルネットワークと共同で、東京都の文京区千駄木地区、新宿区牛込地区・神楽坂地区で300世帯程度、ひまわりネットワークと共同で愛知県豊田市の200世帯程度を対象にした実証実験を開始。最大100Mbpsのインターネット接続、IP電話、ビデオストリーム、双方向ビデオ通信、auとの連携、生活情報、動画付きカラオケなど多様なサービスを提供していく。

ネットワークインフラ、ブロードバンドアクセスとともにIP事業の核となるのがiDCサービス「dotsquare(ドットスクエア)」だ。旧KDDが提供していたサービスを継承し、国内14カ所、海外10都市に拠点を展開している。

同社の強みは、商用IX(Internet Exchange)であるJPIXが同居する大手町ビル、現本社の新宿ビルなど需要が高い山手線内に既存のスペースを保有していること。これに加えて台場、来年春には渋谷にも施設をオープンさせる。

各拠点は、それぞれ独自色を出すことにより、稼働率を上げている。例えば、台場のセンターではコンテンツプロバイダー向けのプラットホーム機能を重視しており、今年7月から提供している大容量のコンテンツ蓄積・管理を行う「マネージドストレージ・サービス」のシステムは同センター内に構築されている。

今回のau合併に併せて行われた組織変更では、iDC事業の強化も推進された。IP事業本部内でIPビジネス開発部

次世代ネットワーク「PERSEUS」のシナリオ